

文の花

森野 水琴

「文豪を呼べ」と全能の神ゼウスが仰せられた。たちまちのうちに死して天上に召された文豪たちが集まった。ゼウスは次のように仰せられた。

「今、人間界の言葉は乱れている。自らのおごりのせいで乱れている。その昔、人間たちが天にも届けとバベルの塔を建てた時、余は人間たちの言葉をバラバラにして、何を言っているのか分からないようにした。その後、人間は文字を發明し、それぞれの言語から文化が生まれ、文学をはぐくみ、そなたら文豪を生んだ。文字には人を平和にする力がある。そこで、そなたたちの生まれ変わりに『本書け』と命ぜよ。一刻も早く文字による平和が訪れなければならない。さもないと、まず粗野な発言をする者は声を出せなくなる。次に文字を書けなくなり、文字を読めなくなり、眼が見えなくなってしまう。だが聴力だけは残しておいてやろう。聞こえてくる言葉で余生を心静かに過ごさせ、来世に期待しよう。そうならないように、そなたたちの生まれ変わりと力を合わせ、何とかせよ。なお語り部には別途指示するので、語り部の子孫たちとも力を合わせるがいい。」

これを受けて、文豪たちは、それぞれの生まれ変わりに手紙を送った。もしかしたら、あなたにも手紙が届くかもしれない。

ある日、郵便受けに手紙が届いた。差出人は天上の文豪になっている。とうとう届いたかと思い、開封してみると

美しい日本語を よみがえらせよ

語り部の子孫たちとも力を合わせよ

と書かれている。どうやら私は文豪の生まれ変わりであるらしい。責任重大であると背筋が伸びる思いがした。

かねてより平安時代の貴族が体験した華やかな文化に憧れているので、当時の文化人になった気分を書いてみることにしたい。時代錯誤しているように思われるかもしれないが止むを得ない。

したためられる言の葉は 雅楽に見合うほど みやびでなければいけない。
天高く蹴られる鞠のように あてやかでなければならぬ。

本日の宴の席では雅楽が奏でられ、蹴鞠を鑑賞している。世の中の喧騒から隔離された別世界である。日本の文化をこよなく愛する者たちの、ゆとりの空間である。

大衆受けする事は想定されていない。そのため集う者は限られてくる。

集う者は日常の生活からは得られない充実感に満たされ、何度となく通うことになる。私もその一人。

雅楽を習うも良し。蹴鞠を習うも良し。私は言の葉をしたためよう。

ところで語り部の子孫たちと力を合わせるには、どのようにすればよいのだろうか。その疑問に答えるかのように天上の文豪から手紙が届いた。

語り部の子孫たちの合同研修を見学する案内である。

同封された地図を頼りに会場になっている森に行くと、大勢で木の葉を響かせている。何と言っているのかは分からなかったが、一糸乱れず響かせているのが心をなごませてくれる。

合同研修は月に一度あるとのこと。森の所在地を秘密にすることで自由に来てよいことになった。

翌年の一月二日に語り部の子孫たちの新年の合同研修が行われた。私も見学に出かけようとしていると、天上の紫式部の分身が訪ねてきて、一緒に見学したいと言う。天上からの願いとあつては断れない。一般の人には紫式部の分身が見えないとのことなので、あたかも一人で移動しているかのように振る舞って森に案内した。

森で行われる合同研修を紫式部の分身は興味深く見ている。

合同研修が終わり、家路につこうとすると、紫式部の分身は宗谷岬へ行くという。天上のトルストイの分身と現地で落ち合うのだという。それが終わったら戻ってくるというので、再会を楽しみにして見送った。

宗谷岬から紫式部の分身が帰ってきた。ほかの分身に宗谷岬を任せてきたとのこと。

一月に見た語り部の子孫たちの合同研修を再び見たいと分身が言う。

二月の合同研修を見学するために森に行った。

研修の冒頭、語り部の子孫たちは風のささやきを傾聴している。

傾聴の効果は着実に研修の成果になっていくようである。

紫式部の分身も風のささやきが気に入ったらしく、森に随時来たいとのこと。

私も新たな表現が生まれそうな予感がして、一緒に来ることにした。

春になって語り部の子孫たちの合同研修を見学するために例の森に行った。今回からは踊り手も加わっているようである。

おだやかな日差しとあいまって、なごやかな雰囲気にも包まれている。

紫式部の分身は光源氏の舞う姿を思い描きながら、到底その域には達していかないと思うものの、いつしか音と舞に酔っていく。

夏になり森林浴を楽しみに森に来た。

隣接した野原では語り部の子孫たちが合同研修している。

日差しに負けないくらいの熱気で語り手は奏で、踊り手は舞う。

紫式部の分身は天上に報告するのか、何やらしたためている。